

～!～ 2019 Dec ～ 2020 Aug 幕間 ～～

トレセンダー屋敷？階・エリの書斎

「ああっ、後ろに逃げちゃダメっ」

水晶玉に向かって大声でエリは叫んだ。が、その叫びはもちろん独り言であり、水晶玉の向こうには届かない。

その刹那、水晶玉の向こうで竜の咆哮が聞こえ、水晶玉全体が霧のような何かで覆われる。

「きゃっ」

反射的に両手で顔を覆った後、しばらくして恐る恐る手をどけると、水晶玉の中には緑の竜と倒れた人々、そしてそこから懸命に撤退を試みる人々の姿があった。

「急いで・・・ドラゴンブレスの再チャージは想像以上に早いから・・・」

「ああ、そこに逃げるとブレスが復活するから一時間とか待っちゃダメよ」

「一箇所に固まっちゃダメ、怖くても同時に動いて目標を散らして・・・」

エリは水晶玉を食い入るように見つめながら、何か動きがある度に泣きそうな声でつぶやいた。

どうやら何とか撤退は成功したらしく、緑の竜の姿が水晶玉から消えると、エリはぐったりと椅子にもたれかかった。

手は桶に漬したかのように汗でびっしりで、ローブの袖は汗じみと強く握った時のしわでぐしゃぐしゃになっていた。

「し・・・心臓に悪すぎる。私が戦うより緊張したわ」

天井を見上げ今日何度目になるか分からない心臓への負担を口にする。

「いくら『経験が必要』って言っても死んじやったら元も子もないじゃない・・・」

「お嬢様」

「ひゃい！」

不意を衝く後方からの声に、一瞬で警戒レベルを引き上げロブの防御機能を有効にする。が、水分を失った喉と慌てて息を吐いたために返事の声は音を外したおかしなものになる。

「ノックはしたのですが返事がなかったもので」

まったく申し訳なくなさそうにアルバートが答える

「コホン。いえ、大丈夫です。戦況を教えてください」
少しわざとらしく、努めて冷静な口調で話しかける。

「イアルノ氏は無事ネバーウィンターに入りました」

「イアルノ・イアルノ・ああ、『ガラス杖』ね」

「はい、途中大規模な襲撃がありました、エミ様も駆けつけ、用意した戦力だけで収まったようです」

「そう、エミちゃんも行ってくれたのね。助かったわ」

「ただ、魔術師本人は現れなかった模様です」

「あら・・・」

「予想外ですか？」

「ええ、必ず来ると思ってたんだけど。でも揺さぶりかもし

れないし、他に手があるのかもしれないし、最初の直感を信じることにするわ」

「私もそれがよろしいかと思っています」

エリは椅子から立ち上がり、くしゃくしゃになったローブをパンパンと叩き装いを正した。それから用意していたいくつかの巻物を無造作にかばんに放り込み、出かける準備を始める。それを見たアルバートは防寒用のマントを手渡しながら話を続ける。

「サンダーツリーの方はいかがいたしますか？」

「グリーンドラゴンが棲みついてたのが予想外だったけど、

あっちは大丈夫そう。なので・・んーっと・・、五日後から屋敷で待機でお願い。それまではエミちゃんのフォローを」

「かしこまりました」

「ネバーウインターへはゲートを使うわ。なのでマントは無くても」

「お嬢様、冷えるのは道中ではなくネバーウインターの地下牢です」

「あ・・そう、そういえばそうね。ありがとう。頂くわ」

「それがよろしいかと思います」

「エミちゃんは今は何を？」

「『たからじま』の入り口の魔法具の動作をチェックしております」

「ではあの子達が帰って来たらすぐにファンダリンを出て中間点でエミちゃんと合流してください。例の水晶玉はここに置いてくれればこちらで回収します。あの子達もしばらくは野宿になると思いますので野戦用パックを多めで準備しておいてください」

「かしこまりました」

そういうともう一度水晶玉を見る。中では街道を歩く一行の姿が見える。どうやらサンダーツリーからネバーウィンターへ向かうようだ。

「心配ですか？」

アルバートもちらりと水晶玉を見て問う。

わざわざ聞かれたのが心外と言わんばかりに語気を強める。

「当然じゃない！あんな小さな女の子をゾンビまみれの廃墟にやって！おまけにドラゴンまでいたじゃない！毒のブレスをまともに浴びて・・ケガがなけりやいいってもんじゃないのよ！」

それを聞くとアルバートは少しうれしそうな顔をして

「そうですね」

と相槌を打った。

二人はしばらく無言で歩く。

階段を二つほど下り、真っ暗な廊下に出る。

エリが小さく呪文を唱えようと、廊下にぼんやりと明かりが灯った。

再び二人は歩き始める。

歩きながらアルバートは先ほどのやり取りを思い出していた
「しかし・・・『ケガがなけりやいいってもんじゃない』とは
お嬢様も言うようになりました」

それを聞いたエリは惘然とした表情で

「アルバートさん、傷は魔法で治りますがそれだけでは済まないこともあるんですよ」

その言葉を受け流し、アルバートが諭すように切り返す。

「その通りです。が、私が言いたかったのは・・彼らの話ではなく、ご主人様がその言葉をお聞きになったら大層お喜びになったでしょうなあということです」

「へ？お父様が？」

「ええ」

そういうと、アルバートは芝居がかった調子で口真似を始めた。どうやらエリとエミの父親の真似をしているつもりらしい。何もない顎をさすって顎髭を撫でる仕草を始める。

「『そうかあ。エリも私の気持ちかわかる年になったかあ』とか言うのではないでしょうか」

「お父様の気持ち？」

一体何のことを言われているのかわからず思わず足を止める。

「ええ、『ケガがなけりやいいってもんじやない』。あの時のご主人様の言葉、お嬢様がその言葉でもって私を諭す日が来るとは感慨深いものがありますな」

アルバートはエリに歩くよう促しながら続ける

「私もご主人様とはかつていろんな難敵と戦いましたが、あの時ほど困り果てたご主人様を見たことはありませんでした」

『あの時』とはもちろん『たからじま』の冒険の後のことだ。確かに父に同じことを言われた覚えがある。その時のことを

思い出したエリの口調が一気にトーンダウンする。

「アルバートさん・・こういう時にあまり意地悪を言わないでください」

「意地悪ではありませんよ。申し上げた通り、感慨深いのです。私はお嬢様二人の成長を見るのが楽しみでここにいますから」

「そこまで心配しなくとも彼らは大丈夫ですよ。これ以上ないほど回復の厚いパーティですのでそう簡単に負けやしません。勝つかどうかはさておいて、ですが、ですのでお嬢様はご自分の事に注力してくださいませ」

「そうね。今はそれどころではないんでした」

そう言うのと、エリは自分を奮い立たせるように大きく深呼吸をして前に進む。着いた部屋の中にはいくつもの巨大な魔法陣。その中の一つの前に立つ。トレンセンダー家の、父の遺産の一つ、大陸の主要地への『ゲート』。

これ以上なく便利な代物で計り知れない価値をもつ魔法機ではあるが、触媒のコストが高すぎてエリでさえ片手で数えるほどしか使ったことがない。

それも片道だけ。往復で使おうものならそれこそ上部の屋敷を売りに出す羽目になる。

「長期戦にはならないと信じていたのですが、それでも皆さんを後から追いかけることになると思います。できればローグの彼女とパラディンとモンクの彼に稽古をつけてあげてください。作戦通りにいけば最終戦では近接戦闘が重要に・・・」

「お嬢様」

「はい？」

「話の腰を折って申し訳ありませんが、パラディンの『彼女』です」

「へっ？私何か変なことを言いました？」

エリは一瞬何を指摘されたのか分からず聞き返す。

「人間の成長曲線と単純に比べることはできませんが、一緒にいる人間のクレリックの方とほぼ同じくらいの少女です。」

実年数では100年ほどだと思いますが」

そう言われてようやく何を指摘されたのかを理解したエリは心底困った顔をする。

「アルバートさんは何でドラゴンボーンの性別や年齢がわかるんですか!？」

今度は逆にアルバートが心底困った顔をする

「なぜ、と言われましても・・・私がお嬢様二人に初めて出会った時にお二人の性別や年齢を間違えなかったことと同じ、としか言いようがないですね。確かにこの地方ではほとんど見かけない種族ですのでファンダリンの人は多分誰も分かっていないと思いますが」

「そりゃ私だって本物のドラゴンボーンを見たのは初めてですもの。文献では何度か見てますけど。なんで今まで言ってくれなかったんですか」

「そもそも今まで間違えているとわかるようなシチュエーションが無かったことと、蔵からわざわざドラゴンボーンの『女性用の』プレートアーマーを出してこられたので・・さすがお嬢様は人を観る目があるなあとの時は感心していた次第です」

「・・・あれ、女性用なんですか」

「もしかして知らなかったのですか？」

「管理目録にはドラゴンボーン用としか書いてなかったもの

で」

「一般向けの鎧に男女の区別はありませんが、あれは儀典用の正装ですの」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「もしかして男性に渡したらとってもまずいことになっていたのかしら」

「もしお嬢様に冗談でも男性用のタキシードを渡す方がいらっしやいましたら、その方の末路には心底同情しますね」

「今度から見分けがつくようになるまでは失礼でも性別を聞くようにするわ」

「私もそれがよろしいかと思います」

出かける前の出鼻を挫かれてどっと疲れた様子のエリだったが、

さすがにそのままフテ寝というわけにもいかず、気を取り直して話を続ける。

「と、とりあえず、話が逸れましたけれど、少しでも上達するようにお手伝いをお願いします」

「パラディンの彼女に教えるのは少々難しいかもしれませんが、やれる限りは」

「無理は重々承知していますけど、少しでも勝率を上げたいんです」

そういうとエリは呪文を唱え、ゲートの向こうへと消える。
残された執事は部屋の出口で小さく呪文を唱え、廊下の明かりを消すと闇の中へ溶けるように消えていった。